

保育者の労働・生活・文化の実態と意識の日中調査研究

—自由記述データ分析から考える保育者のモチベーション—

陳 惠貞

摘要: 本論文のベースは、2011年に始まった日本と中国における保育者の労働・生活・文化に関する実態と意識の国際比較の共同研究である。質問紙調査の自由記述部分の分析結果により、カテゴリ化し、日中の保育者におかれている仕事の環境や制度、保育の質や内容、そして職業観などに焦点をしばって比較し、保育者のモチベーションとの関連性について検討した。労働条件が厳しい現状の中で、保育者としてのモチベーションが低下し、保育の質を向上させる気力さえなくしてしまう者もいる。ネガティブな職業観は労働のモチベーションを損なうばかりか、個人の自己実現や生涯発達にも影響する。今回の自由記述の分析を通して、保育者の研究・研修の重要性と社会的な地位・評価、待遇・給料などは保育者のモチベーションに深く関わるということが再確認できた。日中比較研究を通じて、保育の質を向上させることと保育者の待遇を改善することの打開策を探ることが本研究の目的である。

キーワード: モチベーション、保育者の労働と待遇、保育の質や内容、日中比較研究

I. 研究目的

乳幼児保育・教育現場では「保育士なり手不足深刻化」(亀岡, 2013)ⁱや「酷使される保育士」(鳴沢, 2014)ⁱⁱなど報道で報じられたように、なお厳しい状況にある。2016年2月15日付、匿名でネット上に投稿された「保育園落ちた日本死ね!」ⁱⁱⁱという待機児童問題に関する話題が一時世論を沸かした。それに伴い、保育者の待遇問題も議論された。しかし日が経つにつれ、待機児童問題と保育者の処遇改善は一向に緊急課題として認識されてはいるが、解決策が見当たらないままになっている。

保育者のモチベーションについて、特に在職中の研究・研修制度に焦点をしばり、陳(2015)^{iv}は「保育者の労働・生活・文化の実態と意識の日中調査から考える研究・研修制度と保育者のモチベーション」において日中比較研究を行った。そこで導かれた問題提起として、まずはシステムの違いによって、保育者のモチベーションに差がみられた。中国では保育者の学歴と学歴の向上が昇進につながるシステムであり、それによって保育者の専門性の向上につながるし、モチベーションが高くなる。しかし、日本では学歴向上によって、昇進や給与増につながらないので、意

欲が湧きにくいということが明らかになった。また、「教育研究活動に参加する」ことは中国ではごく普通に専門性の向上につながると認識しているが、日本の保育者は「研究活動」が取り組みにくい環境におかれていると分かった。それは、中国の保育者に比べ、日本の保育者は一人三役を担わなければならないという職務内容からきているものだと考えられる。現状の職務内容を考慮すると、過酷な仕事を強いられるのは、研究活動に支障をきたすし、モチベーションも上がりにくいと考察された。

日本の保育者の文化水準と専門的レベルでの自己評価が低くなっているが、低賃金・重労働のうえ、研究する時間と環境にないことによるものだと考えられる。ゆえに自己肯定感が低く、相対的に無気力に陥りやすいし、モチベーションも上がりにくくなる。日中の国際比較を通じ、離職率の高さは、日本の優秀な人材の流出にもなりかねない厳しい現実が明らかになった。保育者の人材確保と保育の質を向上するためには、確実に研修を行い、研究環境と制度の整備、安定した専門職としての位置付け、労働条件の改善などが緊急の課題であるという結論を導き出した。

そこで本研究の目的は、前回の研究を踏まえ、自由記述の部分进行分析し、さらに検証を行うことである。日中比較研究を通じて、保育の質を向上させることと保育者の待遇を改善することの打開策を探ることが本研究の目的である。

II. 研究方法

1. 調査対象：日中の各調査協力機関の在職保育者であった。日本では、A 県内 N 市とその周辺の市にある保育所と幼稚園に勤務する保育者 498 人中の 395 人分の自由記述である。中国では、N 市、S 市、T 市の幼児教育者 449 人中の 256 人分の自由記述である。以下の割合計算について、総回答者数でなく、日中それぞれ自由記述部分の有効回答者数を母数とする。
2. 調査時期：日本では 2011 年 9 月と 10 月に A 県の N 市と周辺都市で調査を行った。一方、中国では、2011 年 3 月から N 市・S 市・T 市の南北を含む 3 か所で調査を行った。
3. 調査方法：各調査協力機関に依頼し、質問紙と返信用封筒を送り届けた。倫理的な配慮として、調査協力機関の担当者に説明し、了解を得た。各調査対象者の回答が他者に漏れないように個々封印した回答用紙を回収した。
4. 質問紙の有効回収数：日本は 498 部であり、中国は 449 部であった。詳しい調査の概要と内訳について、本機関誌の第 7 号に掲載された武（2015）⁹の論文を参照されたい。
5. 質問紙の項目と内容：

(1) フェースシート（本人の属性に関する項目）	9 項目
(2) 職歴や勤務時間等労働に関する項目	6 項目
(3) 日常生活文化に関する項目	16 項目

なお、研究目的でも言及したように、本研究で取り上げたのは、(3)の 16 項目の内、最後の 4 つの自由記述部分のみである。項目内容について、①「保育の質を上げるためには何が必要だと思うか」、②「現在、最も課題としている保育活動」、③「乳幼児教育に関する職業につい

てどのように考えているか」、④「それぞれの国の保育者、幼児教育について、最も知りたいこと」の4つの自由記述設問である。

Ⅲ. 結果と考察

4つの自由記述のデータから項目内容を吟味し、キーワードをピックアップし、カテゴリー化した。それから、頻度の集計により、割合を算出し、示された傾向を検討した。各設問の上位のカテゴリーを表にまとめた。なお、頻度の少ないものは割愛したので、合計パーセンテージは100%にならない。以下にそれぞれ設問の結果を表と照らし合わせて、考察する。

設問(1)保育の質を上げるためには何が必要だと思うか(表1)

日本の保育者(有効回答者385人分の内130人-33.9%)が、研修への参加や自己研鑽を積み上げることが第1に考えている。2番目の93人(24.2%)は、子ども理解や発達理解を深め、保育の計画・経験の質を上げることが必要だと考えている。3番目に81人(21.1%)は「職場の話し合い、保育士集団の連携」が保育の質を高めると考えている。他に、わずかではあるが、保育者の増員9人(2.3%)や働きやすい環境7人(1.8%)などの労働条件にその必要性を求める保育者がいた。

表1 保育の質を上げるためには何が必要だと思うか

日本における質問紙調査の自由記述より			中国における質問紙調査の自由記述より		
保育の質を上げるために必要と思うもの (385人分)			保育の質を上げるために必要と思うもの (251人分)		
研修への参加や自己研鑽	130人	33.9%	教師の品質(学問教養・視野の拡大・保育者の力量)	103人	41.1%
子ども理解や発達理解と 保育の計画・経験	93人	24.2%	国(政府)の支援(教育への投資、政府の重視)	43人	17.0%
職場の話し合い(保育士集団の連携)	81人	21.1%	現職保育者の研修	30人	12.0%
保育者の向上心(やる気・意欲・自信・ゆとり)	55人	14.3%	賃金の確保(待遇の改善・地位の向上)★	22人	8.7%
家庭との連携	10人	2.7%	園の環境と設備	17人	6.8%
正規の職員の確保や増員★	9人	2.3%	力量を備えた教師陣の確保	14人	5.6%
働きやすい環境(国の政策)★	7人	1.8%	家庭との連携、保護者とのチームワーク	12人	4.8%
			良い保育モデル・保育方法	10人	4.0%

★社会的な地位・評価、待遇・給料に関する項目

一方、中国の保育者（有効回答者 251 人分の内 103 人—41.1%）は、教師の品質として、学問の教養や視野の拡大、保育者の力量など自分自身に保育の質の向上を課している。この質問項目は、日中双方合わせて最も多くの 4 割強を占め、最重要視されている要素である。次に、43 人（17.0%）が国や政府の支援を必要としていると認識している。その他、賃金の確保や待遇の改善と地位の向上について 22 人（8.7%）も一定数あり、処遇の改善が保育の質を上げていくと考えられている。

設問(2)現在最も課題としている保育活動（表 2）

現在、最も課題としている保育活動という設問では、4つのカテゴリー（表 2 と文中に斜体文字で表示）に分類した。1)保育の内容に関すること、2)保育形態に関すること、3)保育体制に関すること、4)保育者に関することの4つである。

その中で、最も多く割合を占めているカテゴリー1)保育の内容に関することのうち、上位にある2つの下位尺度を選出し、比較した。

日本では 1)保育の内容に関することが有効回答者 333 人分の内 206 人（61.9%）と最も多く。その中で、「個性や主体性を大切にし、自己肯定感を育てる保育」が 37 人（11.2%）を占め、「遊びを豊かにする保育」の 34 人（10.2%）が 2 位を占めた。続いて、言葉・健康・音楽・描画等の領域に関することが課題として挙がっていた。

2 位の保育形態に関することは 74 人（22.2%）、3 位の保育体制に関すること 33 人（9.9%）、4 位の保育者に関すること 20 人（6.0%）であった。

一方、中国では、1)保育の内容に関することが有効回答者 160 人分の内 135 人（84.4%）を占めていた。その中の上位は、体育教育活動や健康な体づくり活動 30 人（18.8%）、音楽や美術といった芸術教育活動 19 人（11.9%）などで、各教育活動のほとんどが挙がっていた。「最も課題としている保育活動」という設問に対して、中国の保育者は教育活動として回答したため、「最もしてみたい教育活動」として表示した。この項目について、共に漢字圏の国である両国の解釈にズレが生じたためである。すなわち「課題」という文言は 2 重の意味がある。広辞苑では「題、また問題を課すること。また、課せられた題・問題」^{vi}と解釈している。そして、中国では同じようなニュアンスがあるが、中国の保育者はより具体的な教育活動を質問されたと理解したため、このように回答のズレが生じたと思われる。

中国側の 1 位のカテゴリー 1)保育の内容に関することが日本側より大きく上回る 84.4%を占めるほか、2 位のカテゴリー 2)保育形態に関することは 16 人（10.0%）、3 位のカテゴリー 4)保育者に関すること 7 人（4.4%）、4 位のカテゴリー 3)保育体制に関すること 2 人（1.2%）であった。中国の 1 位が 2 位を大きく突き放すことと、3 位と 4 位の順位は日本と逆転しているのが特徴であった。カテゴリー 1)保育の内容に関することが 84.4%を占めることにより、中国の保育者は、具体的な教育活動を重視していることが分かった。

カテゴリー 4)保育者に関することの「職場内研修の充実」について、中国の保育者(2.5%)は、

日本の保育者(0.9%)より重視している。日本(0.9%)対中国(2.5%)について、有効な有意差があるか否かは統計的な精密な検証が必要であるかもしれないが、この結果は前述した陳(2015)に論じた日中の研究・研修活動における取り組む環境の差異に関係することで明らかにしている。中国の保育者は、日本の保育者より研究・研修活動を取り組みやすい環境にあり、積極的でモチベーションも高いと推察する。

表2 現在、最も課題としている保育活動

日本における質問紙調査の自由記述より(333人分)		中国における質問紙調査の自由記述より(160人分)	
最も課題としている保育活動		最もしてみたい教育活動	
1) 保育の内容に関すること(206人)	61.9%	1) 保育内容に関すること(135人)	84.4%
個性や主体性を大切に、自己肯定感を育てる保育 37人	11.2%	体育教育活動(健康な体づくり活動) 30人	18.8%
遊びを豊かにする保育 34人	10.2%	芸術(音楽・美術)教育活動 19人	11.9%
言葉がけ、関わりを大切にすること 27人	8.1%	社会認識教育活動 18人	11.2%
心に大切に寄り添い、褒めて伸ばす保育 27人	8.1%	読書教育活動 17人	10.6%
健康な体づくりをする保育 26人	7.8%	言葉・習字・識字教育 13人	8.1%
子どもの発達や要求にあった保育 25人	7.5%	ゲーム等の遊びによる教育活動 12人	7.5%
音楽・描画・製作などの保育 13人	3.9%	幼児の手づくり能力育成活動 10人	6.3%
食べることの大切さを伝える保育 9人	2.7%	心理教育活動 9人	5.6%
飼育・栽培などを取り入れる保育 8人	2.4%	科学教育活動 7人	4.4%
2) 保育形態に関すること (74人)	22.2%	2) 保育形態に関すること (16人)	10.0%
障害児保育や発達支援の保育 32人	9.6%	自由保育 8人	5.0%
安心・安定した生活をする保育 28人	8.4%	戸外活動 4人	2.5%
縦割・異年齢保育のあり方 14人	4.2%	コーナー活動 4人	2.5%
3) 保育体制に関すること (33人)	9.9%	3) 保育体制に関すること (2人)	1.2%
子育て支援の保育 24人	7.2%	小学校と連携する 2人	1.2%
小学校と連携する保育 6人	1.8%		
人権を考える保育 3人	0.9%		
4) 保育者に関すること (20人)	6.0%	4) 保育者に関すること (7人)	4.4%
保育技術の向上 12人	3.6%	職場内研修の充実 4人	2.5%
保育士間のチームワーク 5人	1.5%	専門家による講演 3人	1.9%
職場内研修の充実 3人	0.9%		

さらに、表 2 に示している日中の 1) 保育内容に関することの中身を検討すると、日本の保育者が、子どもたちの「個性や主体性を大切に、自己肯定感を育てる保育」と「心に大切に寄り添い、褒めて伸ばす保育」を重要視しているに対し、中国の保育者はこのようなことについて、それほど気に留めていない。これは、日本の子どもたちの自己肯定感や自信のなさに保育者が気づき、意図的に保育活動に取り組もうとすることを示唆している。ここで日中間の文化や国民性の差異を感じさせられた。

日本の子どもたちの自信の低さについて、興味深い国際比較データがある。ベネッセ教育研究所が 1997 年に発表した日本、韓国、中国、アメリカ、ニュージーランド、ブラジルの 6 カ国の主要都市における 11 歳（小学 5 年生）の国際比較調査である^{vii}。6 カ国の 11 歳の子どもたちに「スポーツのうまい子」、「よく勉強のできる子」、「友だちから人気のある子」など 7 項目について自己評価をさせた。全ての項目において、日本の子どもたちの自己評価は他の国の子と比べて驚くほど低かった。謙遜や控えめにすることは美德とされる東洋文化では、中国と韓国も同様だが、それとは異質なものであり、ここで比較をしてもやはり日本の子どもたちの自己評価の低さは突出していた。この調査結果が裏付けるように、日本の保育者はこの問題を強く認識している。それゆえ、日本の保育者が積極的に子どもたちの自己肯定感や個性を伸ばす保育を重んじると考えられる。

設問(3)乳幼児教育の職業について (表 3)

日本では、317 人分の自由記述の回答を得た。その中で、「素晴らしい・やりがいのある職業」85 人 (26.8%)、「大切に重要な役割を持つ職業」69 人 (21.8%)、「責任が重い職業」45 人 (14.2%) と位置づけていて、心身共に「大変な職業」34 人 (10.7%) は 1 割に留まった。「重要性に比べ社会的評価が低い」7 人 (2.2%) と考える人も若干いた。

中国では、2 位、3 位の「忙しく大変しんどい職業」36 人 (14.6%) と「細かい仕事でストレスが大きい職業」30 人 (12.2%) を合わせると 3 割近くになり、1 位の「楽しくて幸せな職業」(15.4%) を 1 割以上超えた。一見、ポジティブな評価が 1 位に占めているようにみえたが、総合的にみると、ネガティブ評価のほうが上位であった。続いて、4 位「責任感が強い職業」29 人 (11.8%)、5 位「専門性が必要な職業」25 人 (10.2%)、6 位「社会的威信の高い職業」24 人 (9.8%)、7 位「子どもに影響を与える職業」21 人 (8.5%)、8 位「社会からの理解と協力がほしい職業」18 人 (7.3%) とそれぞれ僅差になっている。9 位に社会的地位が低く処遇が悪い (5.7%) と考えた人もいた。

表 3 乳幼児教育に関する職業についてどのように考えているか

日本における質問紙調査の自由記述	中国における質問紙調査の自由記述
乳幼児教育の職業についてどのように考え	乳幼児教育の職業についてどのように考える

るか (317 人分)			か (246 人分)		
素晴らしい・やりがいのあ る職業	85 人	26.8%	①楽しく幸せな職業	38 人	15.4%
大切に重要な役割を持つ職 業	69 人	21.8%	②忙しく大変しんどい職業	36 人	14.6%
責任が重い職業	45 人	14.2%	③細かい仕事でストレスが 大きい職業	30 人	12.2%
大変(体力面、精神面共に) な職業	34 人	10.7%	④責任感が強い職業	29 人	11.8%
子どもの発達と子育てのサ ポートをする職業	26 人	8.2%	⑤専門性が必要な職業	25 人	10.2%
自分も成長できる職業	18 人	5.7%	⑥社会的威信の高い職業 (神聖・崇高・偉大)	24 人	9.8%
子どもに大きな影響を与え る存在	14 人	4.4%	⑦子どもに影響を与える 職業	21 人	8.5%
専門性を生かしていく職業	11 人	3.5%	⑧社会からの理解と協力が ほしい職業	18 人	7.3%
親とともに子どもの成長を 喜びあえる	8 人	2.5%	⑨社会的な地位が低く、 待遇が悪い★	14 人	5.7%
重要性に比べ社会的評価が 低い★	7 人	2.2%	⑩他愛的な職業 (子どもを愛する心)	11 人	4.5%

★社会的な地位・評価、待遇・給料に関する項目

設問(4)保育者・幼児教育についてもっとも知りたいこと (表4)

1. カテゴリー「1. 保育について」

日本の質問紙調査の自由記述 (261 人分) では、「中国の保育者、中国の幼児教育について、最も知りたいこと」の結果は「1. 保育について」(153 人-58.6%) というカテゴリーの中で、「保育で一番大切にしていること」が71 人 (27.2%) で、一番知りたいことに挙げていた。次の順位として、「保育の内容 (遊び・集団生活・環境・乳児、異年齢保育)」、「保育方針 (目標・カリキュラム・デイリープログラム)」、「保育者の姿勢 (思いやり、個性をどう育てているか)」と続いている。

これに対し、中国における質問紙調査の自由記述 (246 人分) では、「日本の保育者・日本の幼児教育についてもっとも知りたいこと」のうち、日本の「1. 保育について」(117 人-47.5%) というカテゴリーの中では、「保育の内容(体能、数学、言葉の各モデル・教材)」68 人 (27.6%)

が、一番知りたいことであった。次の順位として、「保育の方針(理念・目標・カリキュラム)」、「幼児教育で重視している点」、「幼児教育者の積極性」と続いている。

2. カテゴリー「2. 保育体制」

保育の体制について、日本の保育者が最も知りたいことは「保育体制のすべてを知りたい」13人(5.0%)、「保育形態」10人(3.8%)、「日本との違い」7人(2.7%)であった。一方、中国の保育者が最も知りたいことは「保育士の勤務パターン」19人(7.7%)、「保育体制のすべてを知りたい」12人(4.9%)、そして「受け持ち人数」5人(2.0%)であった。

3. カテゴリー「3. 幼児教育を取り巻く諸問題」

幼児教育を取り巻く諸問題で、日本の保育者が最も知りたいことは「富裕層と貧困層の格差は保育に影響していないか」と「一人っ子政策は幼児教育に影響していないか」であった。中国の格差が顕著であることはよく知られている。また、世界に例がない「一人っ子政策」の影響も気になるものであった。1979年から2015年まで導入された人口抑制策であり、2016年に撤廃され、これからますますその影響が注目される。

中国の保育者は最も知りたいのは、「親子のこと」と「幼稚園の競争」であった。先進国日本の少子化の影響で、幼稚園の生存競争に関わり、中国の保育者に伝わったようである。

4. カテゴリー「4. 全体に関わる事」

幼児教育の全体に関わることで、いままで取り上げなかったカテゴリーについて述べる。

日本の保育者は中国の幼児教育について「何も知らないので知りたい」人は21人(8%)で意外に多かった。そして「知りたいと思ったことがない」と中国の幼児教育に全く関心がない人が7人(2.6%)いた。「祖父母に育てられていることについて問題はないのか」と「都市と地方の格差について問題意識はないのか」について6人(2.3%)いた。

一方、中国の保育者は「幼児教師の養成」17人(6.9%)と「教育システムについて」15人(6.1%)が1位と2位を占めている。3位に、「教師の待遇・給料」面で13人(5.3%)、4位に「教師の専門的学習」(4.5%)、5位「幼児教育師の社会的地位」9人(3.7%)、6位「教師の福祉」7人(2.8%)という社会的な地位・評価、待遇・給料に関することが気になるようである。その中で特に4位の「教師の専門的学習」について前述したように、陳^{viii}によれば、「日中のシステムの違いによって、保育者のモチベーションに差がみられた」という。日本に比べ、中国の方はより幼児教育・保育を専門職として位置づけ、現職の保育者の学歴向上を促す体制にある。さらに、「保育員」を配置する体制(劉;中田)^{ix}により、日本の保育者の一人三役と対照的に、遥かに研究しやすい環境に恵まれていることが報告されている。幼児教育現場での実践をしながら研究し、研究成果をすぐにフィードバックできる環境にいる。システムの差異によって、日中保育者の学歴に歴然的な差がみられ、モチベーションに影響を及ぼしている。この制度の違いで、中国の保育者は「教

師の専門的学習」について関心があることにも裏づけられている。

表4 それぞれの国の保育者、幼児教育について、最も知りたいこと

日本における質問紙調査の自由記述より (261人分)			中国における質問紙調査の自由記述より (246人分)		
中国の保育者・中国の幼児教育について最も知りたいこと			日本の保育者・日本の幼児教育について最も知りたいこと		
1. 保育について	153人	58.6%	1. 保育について	117人	47.5%
保育で一番大切にしていること	71人	27.2%	保育の内容(体能、数学、言葉の各モデル・教材)	68人	27.6%
保育の内容(遊び・集団生活・環境・乳児、異年齢保育)	44人	16.8%	保育の方針(理念・目標・カリキュラム)	36人	14.6%
保育方針(目標・カリキュラム・デイリープログラム)	24人	9.2%	幼児教育で重視している点	12人	4.9%
保育者の姿勢(思いやり、個性をどう育てているか)	14人	5.4%	幼児教育者の積極性	1人	0.4%
2. 保育体制	30人	11.5%	2. 保育体制	36人	14.6%
保育体制のすべてを知りたい	13人	5.0%	保育士の勤務パターン	19人	7.7%
保育形態	10人	3.8%	保育体制のすべてを知りたい	12人	4.9%
日本との違い	7人	2.7%	受け持ち人数	5人	2.0%
3. 幼児教育を取り巻く諸問題	25人	9.6%	3. 幼児教育を取り巻く諸問題	6人	2.4%
富裕層と貧困層の格差は保育に影響していないか	14人	5.4%	親子のこと	5人	2.0%
一人っ子政策は幼児教育に影響していないか	11人	4.2%	幼稚園の競争	1人	0.4%
4. 全体に関わる事	53人	20.3%	4. 全体に関わる事	81人	32.9%
何も知らないので知りたい	21人	8.0%	幼児教師の養成	17人	6.9%
知りたいと思ったことがない	7人	2.6%	教育システムについて	15人	6.1%
祖父母に育てられていることについて問題はないのか	6人	2.3%	教師の待遇・給料★	13人	5.3%
都市と地方の格差について問題意識はないのか	6人	2.3%	教師の専門的学習	11人	4.5%

国はどういう教育に力を入れているか	4人	1.5%	幼児教育師の社会的地位★	9人	3.7%
学歴社会をどう考えているか	4人	1.5%	教師の福祉★	7人	2.8%
中国の経済中心の現状について	3人	1.1%	違いについて	6人	2.4%
定員オーバーの事故についてどう考えているか	2人	1.0%	知っている	3人	1.2%

★社会的な地位・評価、待遇・給料に関する項目

IV. まとめ

一連の共同研究を通して、自らが立脚する社会の現状に適した乳幼児保育・教育を実践することのできる新しい保育者像を明らかにし、時代の要請に応える保育者養成のあり方を追求することを目標としている。これまでに日本と中国の保育者実態調査の結果を日本保育学会で4回(2012-2015年)にわたって報告し、機関誌にも発表してきた(注1-12参照)。本研究では、同調査の自由記述の部分进行分析して、保育者の意識に関する日中比較を考察し課題を明らかにし、保育者養成に反映できることを願っている。特に重視したのは、保育の質を向上させるために保育者の待遇の改善策を探ることである。

本調査の自由記述設問2にある「課題」について、中国の保育者は教科研究中心の回答になっていたが、これは研究する意識の高さの表れである。しかし、日本の保育者が研究活動の乏しい環境におかれていることは、前回(陳, 2015)の研究結果を再確認することとなった。さらに、日本の保育者が子どもたちの「個性や主体性を大切にし、自己肯定感を育てる保育」と「心に大切に寄り添い、褒めて伸ばす保育」を重要視し、日本の保育者が子どもたちの自己肯定感や自信のなさを正すために、意図的に保育活動に取り組もうとすることが表れている。

日本では、保育・教育の質を向上させるため、また保育者の専門性を向上させるため、法的に定められ、研修を義務化する制度がある。「保育者の資質の維持向上についての研修の強化については、教育基本法第9条、児童福祉法第48条の3第2項に加えて、法令上保育者の研修が義務づけられている」(丹羽ら, 2013) x。それに加え、「教育基本法」や「児童福祉法」のほか、「保育所保育指針」や「教育振興基本計画」や「児童福祉施設の設備および運営に関する基準」などからも保育者の資質の維持向上のための研修を強化する法的根拠等が示されている(丹羽, 2014a) xi。しかし、このように法的には保育者の研修権の保障がなされているにもかかわらず、現に厳しい労働条件や長時間勤務のため、実際に研修に参加することが難しい状況におかれている。このように「研修」することがままならぬ、とうてい「研究」するまでには至らずジレンマに陥りやすく、モチベーションの低下につながる可能性がある。専門性の向上は社会的地位・評価の向上につながり、ついに待遇・給料の改善につながる。それには、研修と研究体制の強化・充実が必要になる。

設問2以外に、特に注目したいのは、設問1・3・4（表1-4に★印のところを参照）に日中の保育者が共通して自らの社会的な地位・評価、待遇・給料に言及したことである。同調査の趣旨とは関係ないと認識していながらも、自由記述の部分で言及し、黙ってられないという不満の意思表示であろう。先般の陳(2015)で、「保育者の労働・勤務条件と社会的地位・給与増などの早期改善が求められる」ことについても提言した。何故なら、近年の日本の保育者にみられる早期離職と離職率の高さ（森本ら，2013；傳馬ら，2014）^{xiii}に関連しているからである。労働条件が厳しい現状の中で、養成校で学んだ原理原則との狭間で悩み苦しみ、保育者としてのモチベーションが低下し、保育の質を向上させる気力をなくしてしまう者もある。ネガティブな職業観は労働のモチベーションを損なうばかりか、個人の自己実現や生涯発達にも影響する。丹羽（2014b）^{xiii}は、「保育者の労働・勤務などの現状」について非正規保育者の割合が増加することに加え、規制緩和により、利潤重視の企業の参入が目立つと指摘した。新聞で報道された「酷使される保育士」（鳴沢，2014）^{xiv}の中で、2012年の保育士の平均給料はすべての業種の平均給料より10万円以上低かったと記載されていた。さらに、同紙の「年収300万円 待遇改善拒む企業」（松田・北川，2014）^{xv}に、ボランティア精神を利用されていると指摘があったように、保育者の低賃金・人手不足による負担増と疲労などの問題は優秀な人材が流出、早期退職や転職の一因である。

4項目の自由記述の日中比較において、保育者の意識の違いが表れていた。その背景には、日本の保育者が受動的な働き方や「同調思考」の強さから抜け出せない現状がある。中国の保育者が個人を確立させて、問題意識を持つ背景には、保育を研究する体制が整っていると考えられる。これからの日本の保育者養成においては、保育者の自己の確立と意識の向上を図り、保育者が受け身の研修に留まることなく、保育を研究する「専門職意識」の向上が課題となろう。保育者の人材を確保するため、保育の質を向上させるために、確実に研修を行い、そのうえ研究環境とシステムの整備、やりがいの持てる安定した専門職として位置付け、労働条件の改善などが課題である。

本研究の目的は、先行研究を踏まえた上、自由記述の部分を分析・検証を行うことであった。2011年に始まった日本と中国における保育者の労働・生活・文化に関する実態と意識の国際比較に、保育者養成の課題とあり方を検討することが最終の目的である。

今回の自由記述の分析を通して、保育者の研究・研修の重要性と社会的な地位・評価、待遇・給料などは保育者のモチベーションに深く関わることが再確認できた。今後も日本の保育者養成のあり方を勘案し、時代の要請に応える保育者を養成することに尽力したい。

*本研究は2015年5月に日本保育学会に於いて発表したものを加筆し、まとめたものである。筆者は、「東アジア保育者養成研究会」の一メンバーとして活動している。研究会の一連活動の成果として、下記の【注】(1)～(12)に示す。

【注】

- (1) 植村広美・劉郷英・平岩定法・栗山陽子・陳惠貞(2012)「中国における保育者の労働・生活・文化の実態と意識の調査研究①」『第65回日本保育学会発表要旨集』, p.176.
- (2) 劉郷英・植村広美・中田照子・宍戸健夫・丹羽正子(2012)「中国における保育者の労働・生活・文化の実態と意識の調査研究②」『第65回日本保育学会発表要旨集』, p.209.
- (3) 平岩定法・劉郷英・中田照子・丹羽正子・宍戸健夫(2012)「日中両国における保育者養成の現状と課題」『子ども学研究論集第4号』, pp.31-44.
- (4) 平岩定法・陳惠貞・劉郷英(2013)「日本における保育者の労働・生活・文化に関する実態と意識の調査研究(1)」『第66回日本保育学会発表要旨集』, p.209.
- (5) 丹羽正子・栗山陽子・中田照子・宍戸健夫(2013)「日本における保育者の労働・生活・文化の実態と意識の調査研究(2)」『第66回日本保育学会発表要旨集』, p.210.
- (6) 中田照子(2013)「日中保育者養成国際シンポジウム 子どもの発達と保育の質の向上 報告書」『東アジア保育者養成研究会』, pp.1-81.
- (7) 陳惠貞・中田照子・丹羽正子(2014)「保育者の労働・生活・文化の実態と意識の調査研究—東アジア保育者養成研究会の学会発表活動を中心に—」『子ども学研究論集第6号』, pp.1-13.
- (8) 武小燕・陳惠貞・中田照子・栗山陽子・植村広美・平岩定法(2014)「保育者の労働・生活・文化に関する実態と意識の日中比較研究(1)」『第67回日本保育学会発表要旨集』, p.112.
- (9) 陳惠貞・武小燕・宍戸健夫・平岩定法・丹羽正子・劉郷英(2014)「保育者の労働・生活・文化に関する実態と意識の日中比較研究(2)」『第67回日本保育学会発表要旨集』, p.113.
- (10) 武小燕(2015)「日中の保育者の生活環境と労働環境に関する比較研究」『子ども学研究論集第7号』, pp.1-12.
- (11) 陳惠貞(2015)「保育者の労働・生活・文化の実態と意識の日中調査から考える研究・研修制度と保育者のモチベーション」『子ども学研究論集第7号』, pp.13-22.
- (12) 陳惠貞・栗山陽子・武小燕・植村広美・劉郷英(2015)「保育者の労働・生活・文化に関する日中比較(2)—自由記述から」『第68回日本保育学会抄録集』, 発表ID 1239.

【引用文献】

- i 亀岡秀人(2013)「保育士なり手不足深刻化 低賃金の改善急務」東京新聞, 2013年8月21日付
<http://www.tokyo-np.co.jp/article/seikatuzukan/2013/CK2013082102000180.html> 情報取得日 2016年11月1日.
- ii 鳴沢大(2014)「社福でもたりぬ人手 行事に忙殺」(「酷使される保育士」)朝日新聞, 2014年8月25日付, 13版4面記事.
- iii 匿名ブログ(2016)「保育園落ちた日本死ね」の原文 <http://anond.hatelabo.jp/20160215171759> 情報取得日 2016年11月30日.
- iv 陳惠貞(2015)「保育者の労働・生活・文化の実態と意識の日中調査から考える研究・研修制度と保育者のモチベーション」『子ども学研究論集第7号』, pp.13-22.
- v 武小燕(2015)「日中の保育者の生活環境と労働環境に関する比較研究」『子ども学研究論集第7号』, pp.1-12.

- vi 新村出(1998)『広辞苑』第五版 岩波書店, p.510.
- vii 田中秀明(2004)「やる気を育てる」『教育心理学 保育者をめざす人へ』(石井正子ら編著) 樹村房, p.83.
- viii 陳惠貞(2015)「保育者の労働・生活・文化の実態と意識の日中調査から考える研究・研修制度と保育者のモチベーション」『子ども学研究論集第7号』, p.17.
- ix 劉郷英・植村広美・中田照子・宍戸健夫・丹羽正子 (2012) 「中国における保育者の労働・生活・文化の実態と意識の調査研究②」 『第65回日本保育学会発表要旨集』, p.209.
中田照子(2014) 「I. 中国における保育者の労働・生活・文化の実態と意識の調査研究—N市を中心に」 陳惠貞・中田照子・丹羽正子「保育者の労働・生活・文化の実態と意識の調査研究—東アジア保育者養成研究会の学会発表活動を中心に—」 『子ども学研究論集第6号』, pp.2-6.
- x 丹羽正子・栗山陽子・中田照子・宍戸健夫 (2013) 「日本における保育者の労働・生活・文化の実態と意識の調査研究(2)」 『第66回日本保育学会発表要旨集』, p.210.
- xi 丹羽正子(2014a) 「III・日本における保育者の労働・生活・文化の実態と意識の調査研究(2)」 陳惠貞・中田照子・丹羽正子「保育者の労働・生活・文化の実態と意識の調査研究—東アジア保育者養成研究会の学会発表活動を中心に—」 『子ども学研究論集第6号』, pp.11-12.
- xii 森本美佐・林悠子・東村知子 (2013) 「新人保育者の早期離職に関する実態調査」奈良文化女子短期大学紀要(44), pp.101-109.
傳馬淳一郎・中西さやか (2014) 「保育者の早期離職に至るプロセス～TEM(複線経路・等至性モデル)による分析の試み～」 名寄市立大学 道北地域研究所年報(32), pp.61-67.
- xiii 丹羽正子(2014b) 「III・日本における保育者の労働・生活・文化の実態と意識の調査研究(2)」 陳惠貞・中田照子・丹羽正子「保育者の労働・生活・文化の実態と意識の調査研究—東アジア保育者養成研究会の学会発表活動を中心に—」 『子ども学研究論集第6号』, pp.9-11.
- xiv 鳴沢大(2014) 「社福でもたりぬ人手 行事に忙殺」(「酷使される保育士」)朝日新聞, 2014年8月25日付, 13版4面記事.
- xv 松田史朗・北川慧一 (2014) 「年収300万 待遇改善拒む企業」(「酷使される保育士」)朝日新聞, 2014年8月25日付, 13版4面記事.

【参考文献】

- 陳惠貞 (2012) 「やる気を育てる保育・教育」 速水敏彦 (監修) 陳惠貞・浦上昌則・高村和代・中谷素之 (編) 『コンピテンス 個人の発達とよりよい社会形成のために』 ナカニシヤ出版, pp.71-80.
- 厚生労働省編 (2008) 『保育所保育指針解説書』 フレーベル館, pp.248-249.
- 文部科学省 (2008) 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館, pp.248-251.
- 奈須正裕 (2002) 『やる気はどこから来るのか 意欲の心理学理論』 北大路書房.
- 櫻井茂男 (1990) 「動機づけ」 無藤隆ら編 『発達心理学入門 I 乳児・幼児・児童』 東京大学出版社, pp.197-209.
- 上淵寿 (2004) 『動機づけ研究の最前線』 北大路書房.
- 上田吉一 (1983) 『動機と人間性』 誠信書房, pp.159-164.

(名古屋経営短期大学子ども学科 教授)